

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
太田 美智子 (旧姓 広瀬)	女 性	1 6 歳	新城市大野 (日 吉)

「爆弾に直撃された防空壕」

会計部利材工場

昭和19年4月、私たち新城高女4年生は豊川海軍工廠へ学徒動員されました。父親は自分が召集されずにいたためか、私が行ってくれるなら国のために尽くせるのでありがたい、と受けとめていました。当時はそれが普通の考え方でした。

家が遠いため寮に入った子が会計部、通いの子が総務部に配属されました。私は会計部の利材工場へ配属されました。会計部は事務をする所かなと思っていましたが、工員さんたちの油で汚れた服を洗濯して、それを繕ったり手袋の先が破れたのを付け替えたりする仕事でした。



昭18 同級生と 写真:太田さん提供

この利材工場には、学徒寮に入った生徒のうちの、名字が「な～む」の人で、事務とはあまりにかけ離れた仕事でした。配属されたのは10名ぐらいでしたが、戸惑いはみんな同じでした。そこで、手紙を全員で書き、不満を係官の阿部少尉に訴えました。しかし受け入れてもらえず、空襲の日まで手袋の繕い等に明け暮れました。工員の方のために、リサイクルの仕事をしていたわけです。

○ コンクリートの防空壕でさえ

8月7日の空襲の日のことです。利材工場の前にはとても大きくて頑丈なコの字型の防空壕があり、空襲の時はそこへ逃げこむことになっていました。空襲警報があるたびに入りましたので、避難には慣れていました。コの字の一番奥が挺身隊の女子工員、中央の部分に私たちが入っていましたが、空襲が始まるにつれてどこかの学徒が入ってきました。出口の方へ男性が逃げ込んで入ってきたので、大きな壕もぎゅうぎゅうになりました。

空襲は、あっという間に始まりました。第一波、第二波と次々に轟音をひびかせて爆弾を落としていきました。そのたびに「それ来たぞ！」と言って、耳に手を当て、震えながら伏せました。第何波目かの襲来で、耳をつんざくような爆発音と同時に壕がくずれ、太陽の光が入りました。私たちが入る防空壕はコンクリート製で、一番と言っていいほど頑丈にできた防空壕でした。それでも直撃を受ければ命はありません。爆弾がコンクリートの壁のすぐ近くに落ちました。

息もできないぐらいの土ぼこり、足は膝下がくずれた土に埋まり、足を抜こう

と思ってもなかなか抜けず、靴も荷物も土の中へ置いたまま、やっとの思いで裸足で逃げ出しました。地上へ出てみると、利材工場もまわりの建物も何もなくなっていて、爆弾の大きな穴が何カ所もありました。第3通用門の丸太だけになった橋を渡りました。私はクギを何度も踏んでしまって、足が痛くても、とにかく必死に工場から遠くへ逃げようと思いました。

私たちがいた防空壕の一部に爆弾が直撃し、多くの犠牲者が出たことを後で知りました。奥の方にいた挺身隊の工員の方が、直撃を受けたり生き埋めになったりして、大勢亡くなりました。私がいた場所から何メートルも離れていない所です。同じ防空壕にいたはずの新城高女の同級生5、6人とは、誰とも会うことができませんでした。みんなバラバラにあちこちへ避難したようでした。同じ防空壕にいても気づかなかったのは、電気が消えて真っ暗で、その上爆弾の直撃で、もうもうとして何も見えなかったからです。壕の壁が崩れて差し込んだ太陽の光を頼りに、みんな必死に逃げたのです。まわりの人を心配する余裕はなく、隣の人がどうなったのかさえよく分からないような状況だったのです。

#### ○ 中野千鶴子さんに出会う

避難している時、民家の方が出てこられ、「家の主人も工場に行ってます。どうかしら？」と心配そうに見ておられました。私の姿を見て下駄をはかせてくれました。うれしかったです。このことは今も忘れません。どこへ行く当てもなく畑中の小道をうろうろしていた時、中野千鶴子さんが、顔面蒼白でトボトボ歩いてくるのに出会いました。「チーちゃん、チーちゃん」と呼んでみましたが返事はありません。いっしょに付いていた人が背中を指さしました。見たら大きな穴があき、赤い血が海のように見えました。爆弾で飛び散った破片か水道管の破片が突き刺さったそうです。「アー！！」と声もなく、ぼう然として見送るばかりでした。あの体でよく歩いてきたな、必死に逃げて来たんだな、と思いながら見送りました。千鶴子さんは翌日、家族に看取られて亡くなったそうです。



多くの命を奪った500ポンド爆弾の破片

拡声器で学徒は寮の方へ集まるようにと放送が耳に入りましたので、声を頼りに寮へたどり着きました。そこには、浅見巖先生、鈴木とよ子先生、小田島先生が集まって高女の安否を確認していました。生徒は、私以外は誰もいませんでした。伝令の方がみえて、そこで耳にしたのは、電気工場の学徒で助かったのは足を怪我した大橋春子さんだけで、みんな死んだという報でした。従姉妹の橋本節子さんも亡くなったと聞きました。何ということでしょうか。私はその場にすくんでしまいました。力が抜けてしばらく立ち上がれませんでした。節子さんや亡くなった友達

の顔が次々と目に浮かんでくるのです。

先生に、「早く家に帰って、家族を安心させてあげなさい。」と促されました。<sup>うなが</sup>電車に乗り、東新町の駅に降りましたら、節ちゃんのお父さんが駅で心配そうに待っていました。「美智子は帰ってきたな。うちの節子はどうかしら？」と聞かれましたが、死んだとはどうしても言えませんでした。東新町から自転車で日吉の我が家<sup>わがや</sup>へ向かっていたら、弁天橋<sup>べんてんばし</sup>で父親に出会いました。「せっちゃんが死んだよ。」と伝えました。父親は、「うそだ。うそだろ。」と言って、信じてくれませんでした。家に帰ってしばらくしたら、せっちゃんのお父さんから電話があり、「節子が死んだので連れに行くから、リヤカーを自転車<sup>きよか</sup>に付けて来てくれ。」とのことでした。その後、工場まで行きましたが、連れ帰ることは許可されませんでした。

その後、千両の山<sup>ちぎり</sup>へ大きな穴<sup>ほ</sup>を掘って、その中へみんな埋められたそうです。私は爆風を受けたせいか、胸<sup>むね</sup>が大きく血が死んでいました。1週間寝込みました。

終戦<sup>せいせん</sup>になって、9月から専攻科<sup>せんこうか</sup>に戻りました。勉強は大切だとしみじみ思い、一生懸命<sup>いっしょうけんめい</sup>がんばりました。動員学徒<sup>どうぎんがく</sup>としてよかったと思えることはあまりありませんでしたが、利材工場<sup>りざいこう</sup>でみんなの嫌う仕事をしてきたことは、私の人生にとっては耐える力<sup>たえるちから</sup>を与えてくれたような気がします。

戦争は絶対<sup>ぜったい</sup>やってはいけません。戦争は悲劇<sup>ひげき</sup>を生み出すだけです。



昭和21年3月25日 専攻科43名卒業記念 写真：太田さん提供

新城高女32回生は112名で、昭和20年3月28日に卒業したことになっていますが、実際は卒業式は行われず、卒業証書も渡されていません。そのまま専攻科に進み、豊川海軍工廠へ継続勤務となりました。終戦後の昭和20年9月に学校が再開され、9月30日に卒業した生徒92名（戦没者22名を含む）と、昭和21年3月まで在籍した43名の卒業生がいました。合計で専攻科卒業生が143名となったのは、戦争末期の混乱期で、鳳来寺高女や他校からの転入学があったためです。

(新城高等学校元教諭 佐藤道洋氏の調査による)